

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

私のイタリア留学記： ボローニャ

* イタリア満喫の一ヶ月 *

大澤 光子

これまで学んできたイタリア語、それがどれだけ通用するか実際に現地に滞在して確かめてみたい…そんな思いから決意した語学留学。また、環境的にも年齢的にも今がチャンスということもあり、語学留学に関する情報を収集したり、留学経験のある友人やイタリア会館からアドバイスをもらい、ボローニャにある CULTURA ITALIANA という語学学校に申し込むことにしました。



【ボローニャ アシネツリの塔からの眺め】

これまで、イタリアにはツアー旅行で2回行ったことがあるものの、ひとり旅は国内も含めてまったくの初体験。また、現地滞在中はアパートでひとり暮らしとなりますが、実はひとり暮らしも初体験。そんな私がそれほど不安も感じずに出発できたのも、行く前にイタリアに詳しい人たちに些細なことでも質問し、いろいろと話を伺うことができたからです。もちろんガイドブックなどを読めば「旅の心構え」的なことは書いてありますが、実際に

人が肌で感じ、経験したことを、失敗談も含めて直接聞くことで、大いに得るところがありました。

イタリアに入って、まずはミラノで三日ほど過ごしました。以前イタリア会館で一緒にレッスンを受けていたシェフの卵の方が、今はミラノ北部のレッコという町で料理修業をしていて、「イタリアに行く時には会おうね」と約束していたからです。現地のリストランテで頑張っているお話など聞くことで、イタリアでも緊張せずに過ごせるような安心感をもらうことができました。

ミラノで過ごした後はいよいよボローニャへ。初めて訪れる街ですが、なんだか溶け込めそうな雰囲気を感じました。それは、その後のボローニャ生活で私の拠りどころとなる BAR に偶然入ったことがきっかけでした。

ボローニャに着いたのは語学学校の授業開始の前日である日曜日。駅前はずがに人が居て賑やかでしたが、学校の場所を確認するため昼過ぎの町を歩いていると、お店はほとんど閉まっていた、なんだか寂しげな雰囲気でした。その日の食事をどうしようかな、などと考えながら町を散策していると、オープンしている BAR をようやく見つけたので入ることにしました。そこはボローニャのたまり場で、いかにも下町の BAR というような感じでした。スーパーも開いてなかったし、仕方ないからここで今日の夕食と一晩分のお水を購入しようと、持ち帰り用のパン二を注文すると、バリスタが話しかけてくれました。今日ボローニャに着いたことや明日から語学学校に通うことなど

話しているうちに自己紹介となり、バリスタは私の名前を聞き取るとすぐに名前呼びかけてくれて、“Mitsuko! Mitsuko!”と連呼。他のお客さんにもそんな調子で私のことを紹介してくれました。夕方 aperitivo を楽しむお客さんが数人いて、時間が経つにつれ賑やかになってきて、アパートがそこからとても近いということもあり、aperitivo を勧められるがままに飲みながら、ポローニャの下町観察と洒落こむことにしました。別の所で BAR を経営している方、隣近所のおじさん連中、“avvocato”と呼ばれている弁護士さん、バリスタの人柄がいいのでわざわざバスに乗って来ているというご婦人など、人間模様が面白く、気がつけばなんと9時までそこで過ごしてしまいました。友人から「イタリアで BAR に通うのもおもしろいよ」とアドバイスされていたので、私は働き者で優しいバリスタがいるこの BAR に通おうと、他の BAR を見ることもせずに決めました。

アパートに行くと、ルームメイトはオランダ人の女性でした。すでにポローニャに数か月滞在していたので、いろいろわからないことを聞いたり、日々あったことを話し合ったりして、彼女とは本当に仲良くなりました。彼女は昼からの授業で、私は朝からの授業。生活リズムが違っていたので、キッチンやお手洗いなど共有部分でバッティングすることもほとんどなく、その点でもストレスなく、よかったです。

学校のクラス分けやコース内容などは、以前の体験記にもたくさん書かれてあったので、私は放課後の課外活動やプライベートでの過ごし方を中心に書きたいと思います。

授業初日の夕方はポローニャを初めて訪れた生徒のためのガイド・ツアー。語学学校の先生と1時間半ほど一緒に町を歩き、手軽に食事のとれるところや有名な市場など、快適に生活を送るためのスポットを案内してもらいました。その後、学校の仲間と仲良くなるための懇親会的 aperitivo もありました。たいていの月曜日は授業初日ということもあってこのようなガイド・ツアーがあり、火曜日から木曜日までは一時間半ほどの programma がいろいろ用意されています。費用は aperitivo や parco に行くためのバス代くらいしかかからず、手頃でした。外での活動だけではなく、オペラやファッションに関するセミナーなど、教室での講義も充

実していました。私は学校の programma に出来るだけ参加しました。旧ポローニャ大学など案内してくれるので、勉強にも観光にもなり一挙両得でした。



【CULTURA ITALIANA のクラスメイトと】

授業は月曜から金曜まで毎日4時間。私が受けたのは、文法クラスでは条件法、接続法、直接・間接人称代名詞など、会話クラスではイタリア特有のジェスチャーやことわざ、また生徒の母国のことわざや CM についてのディスカッションなどもありました。授業についていくために毎日3時間ほど復習・予習のための時間が必要でした。それに加えて、放課後の課外活動への参加、また友人たちとの交流や、さらにポローニャの町も観光地ではないものの結構見どころがあったので、いろんなところを見に行ったりしていると、毎日が本当に早く過ぎていきました。

学校に通い始めて数日が経ち、私は語学の勉強以外にポローニャでしかかったことのために動き出しました。学校ではイタリア語を話せる仲間はいるけど、先生以外はイタリア人ではないので、私としてはイタリア人と過ごせる、あるいは生活の一端を垣間見ることのできる機会を持ちたいという思いがあったのです。とはいえ、自分の普段の生活スタイルからかけ離れたことに挑戦するのは難しいので、日本で日頃していることをそのまま出来ないかと思い、毎週しているテニスかスポーツジムに行くことを計画しました。出発前にもネットで少し調べていたのですが、学校で授業初日に町のいろんなスポットを記載した冊子がもらえたので、それでテニスコートやスポーツジムをチェック。テニスコートは centro になく断念。スポーツジムは、たまたま学校の先生が通っているところで無料の体験レッスンができる聞き、参加す

ることにしました。私は、「GAG」というスタジオで行うエアロビクスに似たプログラムを受けることにしました。音楽に合わせたその動きはハードながらも楽しく、おかげで私は筋肉痛に・・・イタリア語での指示も、とてもわかりやすく面白かったので、そのコースに申し込むことにしました。体験レッスンのインストラクターが私のことを気にとめてくれて、また私も彼女のことがとても気に入ったので、そのインストラクターのプログラムを中心に通い、おかげでポーニヤ滞在中の健康状態はすこぶる良好でした。会員のボロニーゼ達と仲良くなるには日数が足りなかったけれども、顔見知りもでき、最終日にインストラクターに挨拶に行くと、“9月にはまた戻ってくるでしょ？！”と言ってくれ、私も“またあなたのプログラムを受けに帰って来るヨ！”と返事しました。時間的にもかなりハードでしたが、いい経験ができました。

それ以外の思い出としては、平日は学校の後、仲良くなったクラスメイトのポーランド人女性とよく過ごしていました。広場や公園でおしゃべりしたり、スーパー、ジェラテリアやパスティッチェリア、食事にもよく一緒に行きました。他のお友達とも一緒に過ごしましたが、彼女には本当に良くしてもらい、今でもメールのやり取りをしています。もちろん同じクラスだったので、勉強でわからないことなども聞くことができ、とても助かりました。

週末は、偶然学校のパソコンルームで知り合った料理の勉強をしている日本人女性と食事や散策を楽しみに、仲良くフェラーラ・ラベンナ・パルマ・ヴェローナといろんなところに行きました。エミリア・ロマーニヤ州はどこも本当に食事がおいしく、おかげで日本食が恋しくなることは一度もありませんでした。また、仕事でポーニヤに来ている日本人の方とも知り合い、日本人4人で食事を楽しんだりもしました。

さて、例のBARではポーニヤ初日以来、朝は必ずカプチーノを飲みに行き、バリスタや店員さんと話をしてから学校に行きました。妊娠中のバリスタの奥さんとも何度も会って仲良くなり、お腹の中の赤ちゃんの写真を見せてくれたり、お友達のポーニヤ在住の日本人の方も呼んでくれ話をしたりもしました。多い日には一日に三回も顔を出していました。私にとって、いつしかそのBARはかけがえのない社交場となったのです。

そのBARで、行きたい所など、どのようにして行ったらいいか聞くと、必ずと言っていいほどバリスタやお客さんたちが集まって教えてくれて、私が行って見たかった、丘の上までポルティコが続くサン・ルカにも行くことが出来ました。またヴェネツィアに一人で行く朝も、BARに寄ると、“今日は上着を着て行かないと寒いよ”と、その日の天気予報を見てなかった私に教えてくれたりと、とても良い関係を持つことができました。バリスタやそこに集うお客さんたちにいろいろと話しかけてもらったりしましたが、いかんせん語学力不足のため、学校や日本のこと、旅やワイン、後は食事が愛情表現??の話くらいしか出来なかったのが残念で、もっといろんなことを話したいという歯がゆさもありました。それでも、たくさんの方と話すことができ、愉快的こともたくさんありました。

そしてポーニヤ最後の日、折り紙を折ってBARに持って行くと、すぐに店先に飾ってくれて、お土産にと大きな袋のクッキーをくれました。とても親切で、私のことをかわいがってくれたバリスタには本当に感謝しています。



【バリスタとツーショット】

いつかまた会いたいと思える人たちと出会えたことは、今までイタリア語の勉強をしていてよかったと思いました。約一カ月のイタリア滞在。人と繋がり、いい関係が持て、充実した日々を過ごせたと感じています。たとえ片言レベルの語学力であっても躊躇せずにコミュニケーションを取ろうとすれば、なんとか理解しようと耳を傾けてくれるイタリア人たちに、私は多くのことを教えてもらったのでした。

(当館個人維持会員)

パドヴァ通信

第11回『ラクイラー傷ついた町』 “L’Aquila”

深草 真由子

2009年4月6日午前3時32分、マグニチュード6.3の地震が中部イタリア、アブルツォ州を襲った。ラクイラで観測された揺れは、日本の震度階級にして5弱から5強に相当する、かなり強い地震である。この本震の最大の揺れと直後の余震によって崩壊した建造物の瓦礫の下敷きとなって大勢の人々が傷ついた…死者308人、負傷者約1600人。被災者は現在も続く余震に脅かされる日々を余儀なくされている。



【Emergenza...救助活動の様子】

ちょうど日本からやって来た家族と旅行中であった筆者は、ラクイラからそう遠くはないローマでこの地震に遭った。揺れを感じて私たちも目を覚ましたものの、ベッドから起き上がることもせず、すぐに再び眠りについた。しかしこれは地震に“慣れ”てしまっている日本人だからこその反応だったようだ。実際ローマでもかなり揺れたのである。夜中にもかかわらず恐怖のために思わず家を飛び出したローマ人がたくさんいたそうだ。カラカラ浴場の遺跡の一部が崩れ落ちたとも聞いている。

多くの人々の命と住み家を一瞬にして奪ったこの大地震については、消防隊の救助活動や避難キャンプの様子、キリスト教とイスラム教の二通りで行われた告别式から、(毎度のことながら!)ベルルスコーニ首相の失言まで、連日メディアで大

きく取り上げられた。崩壊して死者を出したラクイラ大学の寮は、以前から(今年の1月から小さな地震が頻繁に起きていた)住人らによって倒壊の危険性が指摘されていたことや、大地震を予見したために取り調べを受けていた研究者の話、地震大国日本における災害対策や建築基準、G8の開催地をサルデーニャのマッダレーナから被災地ラクイラに変更するという政府の決定などが話題になった(マッダレーナは、ベルルスコーニがチェコ共和国元首相や女性たちとの「裸の」ヴァカンスや、ノエミら若い女の子たちとの「ハーレム」を繰り広げていたと言われる別荘のすぐそば。4月末から次々暴露される女性スキャンダルを抱える首相にとっては、開催地変更は大正解だったと言えるだろう)。瓦礫の山と化したラクイラのチェントロの有様を見ていると、被災者の無念や将来の生活の不安などが案じられると同時に、私事ながらこの町を一度も訪れることがなかったことを悔やまずにはいられなかった。残された壁や崩れ落ちた丸天井の一部からさえ、その建物の本来の美しさが十二分に伝わってくるのである。主要な教会はほぼ全壊、公共の建物—県庁、大学とその施設、学生寮、病院など—は歴史的な建造物だけではなく、おそらくはお粗末な工事ゆえであったのだろうが、現代建築も倒壊した。この地震によって被災したアブルツォの文化財、芸術品の損害は、第二次世界大戦中の爆撃による戦禍に次いで大きく、1966年アルノ川の氾濫がもたらしたフィレンツェの町の破壊をも凌ぐものであったと言われている。失われた物の大きさは計り知れない。

L’Aquila—「鷲」。1254年、シチリアのフェデリーコ二世の遺志を継いで創建され、ホーエンシュタウフェン朝のシンボル・マーク「鷲」にちなんでこう名付けられた。イタリア中世期に厳密な都市計画の下で作られた唯一の町であり、エルサレムがそのモデルとされたのではないかと推測されている。二つの都市はどちらも丘の上に位置し、標高はほぼ同じくらいで、ラクイラの町の地図を裏返してみれば、川や噴水、重要な教会の位置がエルサレムのそれとぴったり重なりあう。偶然だとすれば不思議なほどの一致だ。創建後ラクイラは経済的な繁栄を遂げ、十五世紀中ごろにはナポリ王国でナポリに次ぐ第二の都市となった。そんなラク

イラのチェントロは中世とルネサンス期に作られた多くの教会や城塞を擁する大変美しい町であった。



【サン・ベルナルディーノ教会、ミケランジェロのプラン】

日本の旅行ガイドにはほとんど載っていないとはいえ、実はラクイラとその周辺は一大観光地として有名である。イタリア半島を南北に通るアペニン山脈の山岳地帯で国立公園となっているグラン・サッソは町の北東にそびえている。珍種のクマやオオカミなどの動物、森の木々や花々、そびえる山と美しい湖。自然を満喫しながらゆったり時間を過ごす、夏のヴァカンスにちょうどいい。スキー愛好者には冬もいい。天気が良ければアドリア海の向こう側、ダルマティアの海岸線まで見渡すことができるという。料理もおいしい。山の産物、たとえば羊肉、羊のリコッタチーズが美味で、料理は生パスタとトマトベースのラグーなど素朴なものが多い。また有名なのは、ここでは大変上質なサフランが生産されているということだ。一キログラムのサフランのために五百時間もの作業が必要とされるそうだから高価なはずである。

しかしあの4月の地震以後ラクイラは立ち入り禁止になった。単純に被害の大きさという点だけではなく、重要なモニュメントが集中していたという点においても、最も悲惨なのは壊滅状態になっ

たこの町のチェントロの有様である。ドウオーモの天井はほぼ全体が崩れ落ちた。Anime Sante 教会のクーポラが余震のたびに少しずつ碎けていく様子は、テレビでも中継された。今ではアブルッツォ国立博物館となっている十六世紀の城塞の状況もひどいものである。博物館に所蔵されている中世から現代までの約三千もの芸術作品の回収作業は、城自体が半壊した危険な状態であったため困難を極めた。幸いなことに作品の多くは無傷なままであったため、博物館が復旧されるまでの間、アブルッツォ州の親善大使として、イタリア内外の展覧会会場を巡っていくことになるのかもしれない。

クーポラと鐘楼が崩れたサン・ベルナルディーノ教会は、ミケランジェロの破れた夢が実現された場所であった。この偉大な芸術家がメディチ家の依頼を受けてフィレンツェのサン・ロレンツォ教会のファサードのプランを構想したのは1516年のこと。それは全く画期的なデザインであったが、その設計の難しさとヌムール公とウルビーノ公の相次ぐ死によって、結局未完成に終わった。サンタ・マリア・ノヴェッラやサンタ・クローチェの白く美しいファサードとは異なり、ただ茶色いレンガが積まれただけで何の飾りもない質素なサン・ロレンツォ教会のそれを、フィレンツェを訪れた方は覚えていらっしやるであろう。1542年に完成されたラクイラのサン・ベルナルディーノ教会のファサードは、ミケランジェロがサン・ロレンツォのファサードのために作成したデザインを模倣したもの、おそらくはミケランジェロ自身が、フィレンツェで実現されることのなかった自分のプロジェクトを、ラクイラの設計者に提供したものと考えられている。

市の中心部から少し離れた所に位置するコッレマッジョ大聖堂については、翼廊のヴォールトが崩れ落ち、その破片が十七世紀に造られたオルガンを壊した。たまたま工事の足場が組まれていた、十四世紀中頃に遡るロマネスク式の見事なファサードが無事であったことは不幸中の幸いであろう。この大聖堂はラクイラ人たちの心の拠り所とも言える場所だ。夏の終わりに、この教会に葬られている教皇ケレスティヌス五世を称えて行われる祭り Perdonanza Celestinianaこそ、ラクイラ人のラクイラ人としての誇りを示す一大イベントだ。1294年8月29日にコッレマッジョ大聖堂で戴冠した教皇

は、勅書によってこの町を「第二のエルサレム」と制定し、それ以来浄罪を求めて多くの巡礼者がこの町を訪れるようになった。今日では中世の衣装に身を包んだ行列が当時の教皇勅書を担ぎながら、市庁舎からコッレマッジョ大聖堂までをそぞろ歩いて、ケレスティヌス五世とラクイラの町の伝統を称えるのである。今年はこの祭りを見ることができるのだろうか。復興へ向けての第一歩としてなんらかの形で開催されるとしても、ラクイラの人々にとっては悲しい祭りとなるだろう。

最後になったが、308 人の犠牲者、そしてこの308 という公式の死者数には含まれていない無名の外国人犠牲者の冥福を祈る。



【コッレマッジョ大聖堂の美しいファサード】

(元会館スタッフ)

… 会館 だ よ り …

イタリアの暮らし方

コレンテでおなじみ「パドヴァ通信」の筆者深草さんをお招きして、イタリア暮らしの実体験・実践方法を伺うセミナーです。現地の生の情報を聞くことができる貴重な機会です。ぜひお見逃しなく。

講師：深草 真由子(京大文学科)

日時：9/5(土)16:00～18:00

参加費：受講生・一般 1,500 円

個人維持会員 500 円

会場：日本イタリア京都会館 大阪校

定員：20名(最少催行10名)

イタリア語 in ヴァカンス

秋の連休に、京都で楽しみながらイタリア語を学んでみませんか？

講師：当館イタリア語講師

日時：9月20日(日)～23日(水)

10:00～16:30(最終日は14:00 終了)

参加費：30,000 円(教材費・税込)

会場：日本イタリア京都会館 本校

実用イタリア語検定 直前講習会

10月4日(日)に行われる実用イタリア語検定の本番に向けて、よく出題される文法事項や日本人がひっかかりやすいポイントを懇切丁寧に指導します。

講師：当館イタリア語講師

日時：9/26(土)

①5級向け：10:30～12:00

②4級向け：13:00～14:30

③3級向け：15:00～16:30

参加費：2科目 一般・受講生 3,000 円

個人維持会員 1,500 円

1科目 一般・受講生 2,000 円

個人維持会員 1,000 円

会場：日本イタリア京都会館 本校

定員：30名



進化しつづけるイタリアの旅

イタリア政府観光局のエンリコ・マルティーニ局長を講師としてお招きし、アグリツーリズモの魅力と、ご出身地でもあるマルケ州の隠れた観光スポットについてご講演いただきます。ぜひお見逃しなく。

講師：エンリコ・マルティーニ(イタリア政府観光局局長)

日時：10/3(土)18:00～19:30

参加費：受講生・一般 1,500 円

個人維持会員 500 円

会場：日本イタリア京都会館 本校

定員：50名

編集・発行 / (財) 日本イタリア京都会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4

TEL: (075) 761-4356 / FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italia.on.arena.ne.jp

URL: <http://www.italia.on.arena.ne.jp>